

No.34 スティーブン・アントナコス 「Trio-3」

Stephen Antonakos

作家のメッセージ / 日本住宅公団（現：UR 都市機構）「ミニ通信」より

私が生まれた小高い丘には一日中青い光に満たされた清澄な空間があり、夜そこは最も深青を帯びていました。夜明けと日没には、ピンク、金色、赤が空間に溶け込みすべては高い丘に縁どられ、包まれていました。ファール立川に建ち並ぶ大きなビルとビル間の空間、それが私のネオンが縁どり、祝福する対象です。

私はこれらのビルの位置を空間全体の中で感覚できるように、そして空間そのものを感じられるようにするために、ネオンを建築の焦点に置きました。立川の両端にあるビルにネオンを設置することで、両端に挟まれた空間を“包括”するのです。

ネオンは建築の焦点上にあるため、見る人が運転中であろうが、立ち止まっていようが、歩いていようが、端にある大きなビルよりもずっと高いものとして知覚されることとなります。

私が次にネオンの設置場所として興味を持ったのは、5号街路沿いの長さ40メートルのペデストリアンデッキの屋根でした。この場所には歩行用の階段が設けられているからです。

進むにつれてアートがついてくるというように、歩きながらアートを見るというアイデアを私は気に入っています。

また“驚き”が好きな私は、6号街路と3号街路の角に近いビル間の斜めに切り込んだエントランスにネオンを設置したいと思いました。この場所は全く異なる空間感覚を、ほとんど感嘆符のように与えてくれるからです。

私が興味を持つ感覚というのは複雑です。それは視覚的であり、物質的、また感情を有しています。

外を見たり上を見たりしながら地上を移動し、またビルの中に入って外を見たり下を見たりする、それにつれて感覚は変化します。

私たちの空間感覚もまた、自然光が真昼に近づくにつれ増え、夕方になるにしたがって減るように、絶えず変化します。建築物が完全に見える日中、ネオンによって規定される空間も夜になると変化します。その時空間は立川から無限に続いているかのように見えます。

これはすべて、外的人間、ある特定の場所、社会的文脈における共同体感覚に関わるものです。しかし私にとってアートとは、私たちが孤独な時、誰であれ、どこであれ、内的人間(人間の魂)を鼓舞するものでなければなりません。

この内的空間に到達し、それを照らし出すことが私の願いです。